

## 創立 38 周年記念懇親会「私のバッハ体験」

高田 功二 (団員)

さる7月3日、目白聖公会にて東京バッハ合唱団創立38周年記念懇親会が開催されました。団員のほか、多数の団友、後援会員の方々にお集まりいただき、大村健二氏の司会のもと、なごやかな雰囲気でもパネルトークが進行しました。30年以上にわたり、合唱団の様々な活動をサポートし、当合唱団を支えている後援会組織の方々から、今年は新しい試みとして4名の方が各々20分ずつ、「私のバッハ体験」という演題で講演されました。

1人目は、小諸在住の小杉茂雄氏で、小学5、6年の頃、映画『オーケストラの少女』の中でストコフスキーが演奏した<トッカータとフーガ>によって初めてバッハに接し、以後、NHKラジオ「音楽の泉」でのカンタータ78番に感動された経験などを回想され、野村胡堂著『バッハとシューベルト』内の「西洋音楽史からバッハを失うよりも、バッハ以降の全部を失うほうを選ぶだろう」という文章に共感しておられました。そして、久しぶりにバッハ合唱団の定期演奏会を聴き、“バッハの霊が乗り移ったような天女の舞いの如き大村先生”のご活躍を賞賛されました。

(小杉氏より当日のスピーチ原稿を頂戴しましたので、次ページにその抜粋を掲載させていただきます：編集部)

2人目はワーナーミュージック・ジャパン勤務の鈴木徹太郎氏。初めは聞き手として、次に合唱団員として、現在はクラシック音楽を専門とするお仕事をされ、当合唱団を退団されてから10年経過するが、大村先生ご夫妻は人生の師であられるとのこと。今回、テルデック社からCD153枚という膨大なバッハ全集が発売されたが、声楽部門の翻訳や楽曲解説を一人で引き受けられた杉山好先生のお仕事や、その編集にあたって中心的な役割を担われた鈴木氏の苦労話を具体的に話されました。最後に、無人島に持って行く音楽として、同氏は、なんと<コーラン>を挙げておられました。

3人目は、大学で中国宗教思想史を専攻し、教えていらっしゃる原田二郎氏で、ジャズとバッハとの関連性などユニークな講演をされました。カール・

リヒター全盛期にバッハに開眼し、角倉一朗先生のNHKラジオ番組等で勉強するも、大学時代はジャズ喫茶に通い、コルトレーンやジョン・ルイス等のジャズに精通するようになる。80年より再びバッハに戻るが、この2つの音楽から、人生の苦しいときに人生の喜びを得たとのこと。そして、“歌、スイング、即興性”において、ジャズ音楽とバッハとの共通性を強調しておられました。

最後に、17世紀イギリスを中心とした西洋史がご専門で教鞭をとっていらっしゃる青木道彦氏が話されました。同氏は33年前から当合唱団の演奏を聴いておられるとのこと、戦後のAM放送より種々のクラシック音楽に接し、クルト・トーマスの<クリスマス・オラトリオ>で病みつきになり、1966年9月に生演奏で聴いたカール・リヒターに感銘を受けられた。バッハは、職人としてのすばらしさと時代に逆らう頑固な面があり、しかも深くやさしい感情をもっている人である。その音楽には16~17世紀の古いものと18世紀の新しいものが混在している。そしてその音楽を聴くと、18世紀の街角の光やささやき、たたずまいを感じることができる、とのことでした。

4人の方のスピーチの後、月報456号に「憲法第9条の価値について」を寄稿された野村勝時氏の体験談等、終了時刻を過ぎても話しは尽きず、といった感でありました。当日は全員が、バッハの伝記『カントル・バッハ』(ポール・ドゥ・ブシェ著、大村恵美子訳)を記念としていただき、閉会となりました。

各々のバッハ体験をお聞きして、各自の生きてこられた時代や背景は異なっても、バッハに対する無限の信頼や愛情は同様で、その音楽性、宗教性、人間性をたたえた共通項を感じました。そのバッハを40年近くにもわたって演奏するアマチュア合唱団が存在し、伝統を守られているということは、そうした同じベクトルがあり、大村先生という核が存在するからこそであり、ややもすると人間性軽視の現在のこの国において、とても貴重なことと思われました。

## 私のバッハ体験

小杉 茂雄（後援会員）

私は30年ほどのサラリーマン生活の後、長兄の急死により家業（フルーツショップ、大正13年創業）を継ぐはめになり、今日に至っております。ただし、実際には長野県の小諸に移住し、現在は月に3、4回東京へ顔を見せに出ております。

さて、「私のバッハ体験」ということでありますが、初めてバッハを知りましたのは、小学5年か6年の頃だと思いますが、アメリカ映画のディアナ・ダービン主演の『オーケストラの少女』で、あの独特の風貌の白髪のストコフスキーが、ダービンに向かってしみじみと「バッハ、バッハ、バッハ」と連呼したあと、ピアノに向かって＜トッカータとフーガ＞ニ短調BWV565をひく場面があり、同曲に感激のうえ、なげなしのポケットマネーで、「ブレー氏」のオルガン演奏のレコード（SP盤）を買い、連日聴きつづけたのが、初めての出会いでありました。

その後、①フーベルマンの＜無伴奏パルティータ＞第1番第3楽章サラバンドとドゥブル、②ブッシュ室内楽団の＜ブランデンブルク協奏曲＞第4番、③エドウィン・フィッシャーの同第5番、④メンゲルベルク指揮の＜管弦楽組曲＞第2番等を聴きあかしました。ただし当時は、バッハの作品レコードは極端に少なかったように思います。特にカンタータにいたっては皆無といってよいほどでした。

その頃（昭和25年頃だと思います）、日曜日の朝8時からNHKラジオ（未だ民放はありませんでした）で、村田武雄先生の解説の「音楽の泉」という1時間番組がありまして、あるとき、カンタータ第78番の第2曲のソプラノとアルトの二重唱を、ラインハルト少年合唱団が演奏したレコードがかかり、その美しさに我も忘れ、さっそくレコードを買い求め、愛聴したものでした。これが、初めてカンタータを聴いた原点であります。

LP時代に入り、ぼつぼつ全曲盤が出るようになり、英デッカ（日本ではロンドンレーベル）からシュザンヌ・ダンコのソプラノで第51番と第202番のカプリング（ミュンヒンガー指揮）や、アルヒーフ（ポリドール）からカール・リステンバルトやカール・リヒターが出てきましたが、フェリックス・プロハスカ指揮バッハギルド・コーラスの第70番やヘルマン・シェルヘン指揮の第76番が、特に印象深くやきついております。

レコードでしか聴くことの出来なかったカンター

タを、あるコンサートの帰りに、ポスターとチラシで「東京バッハ合唱団」の存在を知り、さっそく後援会に入会させていただき、生演奏のカンタータを、しかも日本語で聴けた喜びはまた格別で、レコードの限界を知らされた次第でありました。

実は大村先生の『バッハの音楽的宇宙』を初めて拝見したとき、それまではただ何となく美しい曲だなあ、ということで、右脳だけで漫然と聴いていたのが、先生の著書が出る少し前に出版された漫画家の砂川しげひさ氏の『のぼりつめたら大バッハ』の中の教会カンタータ200曲完聴記を参考にしていた時でしたので、左脳が電気ショックを受けたような大感動を覚えた次第で、あらためて大村先生のカンタータに対する造詣の深さにおどろき感激し、さっそく礼状をお出ししたところ、月報に載せると言われて、とても活字になるようなシロモノではないので辞退させていただき、いずれ次の機会に何かをとというお約束で、本日の出しゃばりと相成った次第であります。

それにつけても、大村先生のバイタリティーと情熱の、バッハに対する思い入れのすごさは本当に敬服の極みであります。何かバッハの霊が乗りうつたのではないかとさえ思えるほどであります。

どうぞこれからも、お身体を大切になさって、40周年、50周年を迎え、ますますお元気で我々をご指導くださいますよう、お祈り申し上げます。

### バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.6

「バッハ・カンタータ 50 曲選」は、販売特約店のアカデミア・ミュージック株式会社をとおして、以下の全国各店頭での取り扱いが始まりました。

ヤマハ（銀座、渋谷、池袋、横浜、藤沢、所沢、札幌、仙台、新潟、名古屋、心斎橋、神戸、岡山、高松、福岡の各店舗）

銀座 山野楽器

銀座 教文館

国立楽器

タワーレコード（新宿店、渋谷店）

京都 十字屋

鹿児島 十字屋

パナムジカ（京都）

河合楽器（青山店）

銀座の山野楽器や教文館では、特設のコーナーができています。おついでがありましたら立ち寄ってみてください。

## バッハを聴く喜び

(記念懇親会でのご挨拶)

花井 鉄弥 (後援会員)

私は難しいことは何も判らないのですが、バッハのコンタータを聴いていると不思議に心が安まるのです。何度もくり返し聴いているうちにだんだん身体の中にしみこんで離れられなくなるのです。大村先生の『バッハの音楽的宇宙』を傍らに聴いておりますと、各々の曲についてより深い理解が得られるように思います。

定期公演の折り、団員の皆様が、指揮台の大村先生に全神経を集中させて、すべてをゆだね、全身全霊で歌っておられる姿を拝見しますと、客席の私どもにも唄う喜びがひしひしと伝わってくるようで、本当に感動させられます。

一方、客席の私は、開演 10 分前ごろから、いよいよ待ちに待った演奏が始まるぞという期待感が段々につのってきます。やがて開演のベルが鳴り、団員の皆様が静かに入場され、オーケストラの皆さんも位置が定まって音合わせがすみ、そしてソロの先生方が入場され、最後に笑みを浮かべて大村先生が拍手にこたえられ、指揮台にお立ちになります緊

ているように思えます。そして演奏が始まります。私は出来るだけ、この瞬間を落ち着いて心もち良く迎えたいために、いつも開場と同時に席につき、心を静めて、開演を待つようにしております。

演奏会が終わって家路につく折りも、今日の演奏は本当に良かったと、電車で揺られながら黙って目をつぶって曲目を反芻しておりますのも、醍醐味の一つです。とくに前回第 87 回定演のアンコール曲“ながみ前に出で”のオルガンコーラルと合唱には本当に感動しました。

雑事に追われて余り時間もないのですが、休みの日、朝食を終えて、コーヒーを入れるのももどかしく、スピーカーの前に坐るのも、何ものにも換えがたい喜びの一つです。

皆様方の歌う喜びに対して負け惜しみではないのですが、聴く喜び、そして、バッハの音楽を聴く喜びをお与えくださった大村先生、バッハ合唱団の皆様に、いつも心から感謝している次第です。世の常ならば定年の時期を迎えられようという折り、精力的につぎつぎと新しい企画を打ち出され、バッハと共に歩んでおられる大村先生のお姿に本当に励まされます。どうぞいつまでもご健康に、私どもにより音楽をお聴かせくださいますように。

●ライブツイヒの「トーマス・ショップ」  
で売られている「バッハ・グッズ」の案内パンフレット  
(次ページ新刊紹介『バッハへの旅』より)

張の一瞬です。緊張と期待感がこの一点に凝縮され

『バッハへの旅—その生涯と由縁(ゆかり)の

## 街を巡る』

加藤浩子・文、若月伸一・写真

東京書籍 2000年6月刊

### 新刊紹介／大村恵美子

8月26日ー9月3日の、「キリスト受難劇」とバッハの故郷を巡る旅（JTB主催、パラビジョン企画）を前にして、とても実用的にも参考になる本が出ました。

東京バッハ合唱団では、1983年以来4回にわたって、バッハの足跡をたどってドイツ演奏旅行をしてきましたが、4回とも参加されて、おびただしい記念写真やパンフレットをお持ちの団員の方々でも、2000年の現在、それらの諸都市が、どう変わらないでいるか、あるいはどう変貌をとげたか、この1冊の本に含まれているたくさんの写真と解説で、興味深く比較することができるでしょう。

私自身は、1996年にかなり念入りな下見をし、ひきつづき翌1997年に、第4回の演奏旅行を皆さんとしてきたわけですが、その後のわずかな年月で、今年のバッハ記念年に向けて、大掛かりな観光化が遂げられたことにおどろきます。今後は、もっともっと急ピッチで、バッハがドイツのために外貨を稼ぐようになることでしょう。たとえば、みんなで訪れたドルンハイムの、あの小さな聖バルトロメオ教会のところで、著者は「この木の下に観光バスが並ぶ日も、きっと近い」と書いています。

内容は、伝記の年代順に、22の都市に分けて文と写真をととのえています。アイゼナハ、オールドルフ、リューネブルク、ツェレ、アルンシュタット、リューベック、ミュールハウゼン、ドルンハイム、ヴァイマル、エアフルト、ヴァイセンフェルス、ハレ、ケーテン、ツァイツ、カールスバート、ハンブルク、ライプツィヒ、アルテンブルク、ナウムブルク、ポツダム、ベルリン、ドレスデンー。そのうち、私たちが4回の旅で訪れなかったのは、わずかに、大して重要でない5都市（ヴァイセンフェルス、ツァイツ、カールスバート、アルテンブルク、ナウムブルク）のみ！ 私たちの旅の徹底ぶりがわかります。

その4回の旅の間、はっきりしなかったところや、その後つけ加えられたところなど、あれこれと補足しながら、各自の「バッハへの旅」を、心の中でもう一度、再構成してみるのには、バッハ記念年にふさわしく、楽しい仕事となるでしょう。

文章を書いておられる加藤浩子氏は、1985年のバッハ生誕300年記念に、バッハに親しむ機会を得、その後、慶応大学修士論文、そしてまだ東独だった

ライプツィヒへの留学、という経過をたどり、今回、東京書籍の鳥谷健一氏、写真の若月伸一氏との共同作業によってこの本を生み出されました。私も、この本を携えて、またバッハに会いに旅してこようと思っているところです。

●リューネブルク、聖ミカエル教会付近の石畳の路地。バッハはこのような小路を「朝課合唱団」として歩きまわった。  
（『バッハへの旅』より）